



問い「古典は本当に必要なのか」／答え「古典を社会や自分との関わりの中で生かしていく」：
ICTを用いて高校生と考える

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 『札幌国語教育研究』編集委員会 公開日: 2025-03-26 キーワード: 作成者: 菅原, 利晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000463

問い 「古典は本当に必要なのか」／答え 「古典を社会や自分との関わりの中で生かしていく」

——ICTを用いて高校生と考える——

菅原利晃

はじめに

古典の学習に対する姿勢については、中央教育審議会答申（二〇一六）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では次のように示されている（注1。傍線は筆者による）。

○高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

古典の学習については、言語文化を積極的に享受するという姿勢がない、古典を社会や自分との関わりの中で生かしていくという点が弱いというのが課題だとしている。

単なる「読み取り」だけではなく、古典を自らのものとする授業づくりが求められているのである。

本稿では、古典の意義、古典学習の意義をもとにした課題について高校生自身が対話をもとに自らの考えを深める実際の授業実践にもとづき、古典を「社会や自分との関わりの中で生かしていく」という点について考察、検証する。

一 概要

日時 実施時期…令和二年九月～十一月

大学教員特別講義（ゲスト講義）一回目…令和二年十月三十

日（金）

大学教員特別講義（ゲスト講義）二回目…令和二年十一月二

日(月)

対象 北海道函館陵北高等学校 三学年

単元名 古典は本当に必要なのか「稜北

指導教諭 長澤元子教諭

教材 『徒然草』第五十段ほか

指導計画

・コロナで顕在化した問題に関連するニュースを集め、問題点を言語化する。

・Padletを用いて情報を集め、Slackにより生徒同士で対話し意見交流を行う。

・ゲストとの対話(Zoomによる大学教員特別講義)。

・今までの資料や対話をもとに、自分の考えを文章にまとめる。

本授業は、すべて長澤元子教諭の構想・計画によるものである。

単元は、現代文Bの授業をもととし、一年間の現代文の授業を、

「国語の三つの力」を育成する主単元と、大学進学のためのトピ

ックを扱う副単元を組み合わせた、「主題単元学習」である。本稿

で報告する授業は、この副単元の中の一つに位置し、「大学教員特

別講義(こてほん「稜北)」である。なお、本稿では、『徒然草』

五十段を用いた授業についての実践報告及び考察は省略し、古典

学習の意義に関する単元の部分のみを扱う(注2)。

本授業のはじめの、生徒に対する長澤教諭の呼びかけは、「古典

は本当に必要なのか「稜北」チャンネルをどんどん活用していきましょう！ここで話し合いをした結果最終的に論文にまとめます。」というものである。

単元の目標としては、「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。」(読む能力)、「古典に用いられている語句の意味、用法について理解する。」(知識・理解)が配される。

筆者は、十月中に、Slack上で長澤教諭の指導のもとで生徒と対話を行い、その後、大学教員特別講義(ゲスト講義)のゲストとして参加した。一回目が令和二年十月三十日(金)五校目、二回目が令和二年十一月二日(月)二校目である。

なお、長澤元子教諭が指導した生徒とのSlack上のやりとりであるが、筆者が関わったところの一部を次に載せる(実際は横書きである。なお、以下、A、B、C……は学習者を示すが、C以降についてはSlackの書き込みの順とした)。

◎菅原利晃(教育大札幌) 2020年10月29日15:51

論点整理? 例えば、

・「古典」は必要か? 〓 「高校の古典の授業」は必要か?

(誰が学ぶのか)

・「古典」は必要か? 〓 「古典の文法」は必要か? (学び

方)

・「古典」は必要か？ Ⅱ 「古典」は役に立つか？ 使えるか？ (古典とは何か)

ところで、一石を投じますが、

・『源氏物語』などを原文ではなく、現代語訳で勉強してもいいのではないのでしょうか？ マンガもだめですか？

・現代文(の授業)では、現代語・現代文法で書いたり話したりするのに、古典(の授業)は書いたり話したりしないのはなぜ？

・古典は、文学・文芸や芸術なのでしょうか？ 能や歌舞伎は学校で学ばないのはなぜ？

・そもそも、文学って何？ 必要でしょうか？

・古典を勉強するのは、世界でも日本だけなのでしょうか？ などの疑問も生じるかと。。。

◎菅原利晃(教育大札幌) 2020年10月29日18:58

すでに長澤先生が「確かに論点整理が必要ですね…。古典という必修授業が必要か？ という論点でいいですかね？」と述べていますが、上に書いたところも、ぜひ考えてみてください。

「古典の授業」なのか、「古典文法の授業」なのか、「古典文学の授業」なのか、「大学入試のための古典の授業」なのか……

「古典」は役に立たないけど、「古典の授業」は役に立つから必要なのでしょいかね？

「○○○のための古典の授業」のところはあえて「大学入試」と入れましたが、ほかには？

2件の返信

○学習者G

人間づくりのための古典の授業

○学習者G

教養のための古典の授業

次節で触れる、大学教員特別講義(ゲスト講義)の前に、筆者が予告として書き込みをしたものである。これについては、学習者Gのみが二件の返信をしている。

二 大学教員特別講義(ゲスト講義)当日の様子

まず、大学教員特別講義(ゲスト講義)一回目…令和二年十月三十日(金)について述べる。

当日は、Zoomにより授業の中でリモート講義を行った。題は「古典は本当に必要なのか―函館陵北高等学校の生徒と考える―」とし、スライドを用いた。

はじめに、「1古典は本当に必要なのか 考える方法」として、「分析の方法」を提唱した。そこでは、①「事象」として、古典が必要とはどういうもの・ことか(かつては、今後は、もし、どうしたい等)、②「状況・条件」として、古典が必要となることへ

の状況・条件は？（状況・条件は変わっているか、変わるとどうなるか等）、③「選択」として、古典が必要であることには、他にどんな選択肢があるか（他の可能性は、他を選択したらどうなるか等、他教科、対象、小中高の場合等）、④「人」として、古典が必要なのはだれが必要なのか（かつては、今後は、もし、どうしたい等）、⑤「手段」として、古典が必要であるためには（どうすればよいか、どんな手段があるか、どのようにしたい等）という五つの観点を生徒に提示した。これらは、実は「5W1H」にもとづくものである。

次いで、「2古典は本当に必要なのか 論点整理の具体例」として、いくつかの例を示した。前日のStackの書き込みと同じ内容である。ここでは、①「古典」は必要か？ ②「高校の古典の授業」は必要か？（誰が学ぶのか）、③「古典」は必要か？ ④「古典の文法」は必要か？（学び方）、⑤「古典」は必要か？ ⑥「古典」は役に立つか？ 使えるか？（古典とは何か）、という三つの点を示した。さらに、次のような具体的な問いを発してみた。

・『源氏物語』などを原文ではなく、現代語訳で勉強してもいいのではないのでしょうか？ マンガもだめですか？

・現代文（の授業）では、現代語・現代文法で書いたり話したりするのに、古典（の授業）は書いたり話したりしないのはなぜ？

・古典は、文学・文芸や芸術なのででしょうか？ 能や歌舞伎は学校で学ばないのはなぜ？

・そもそも、文学って何？ 必要でしょうか？

・古典を勉強するのは、世界でも日本だけなのででしょうか？

これらの問い・疑問は、古典教育、古典の授業において数多く論じられているものである。

これらを受けて、「3古典は本当に必要なのか まとめ方の例」として、今後、考察を進める上でのポイントを示した。すなわち、

「古典の授業」なのか、「古典文法の授業」なのか、「古典文学の授業」なのか、「大学入試のための古典の授業」なのかという点を考えるとよいことを示したものである。

講義の最後のまとめとして、「古典」は役に立たないが、「古典の授業」は役に立つから必要ということなのかを考えるべきであると伝えた。

その際に、具体的な考え方として、「○○のための古典」又は「○○のための古典の授業」という文言の○○のところを考えてほしいと提示した。○○のところは今現在の講義を受けている生徒には、あえて「大学入試」と入れて、古典は、もはや受験のためだけにしか必要になっていないという現状を示し、その是非を問うた。さらには、「大学入試」以外に、君たちが考えられるも

のはほかにあるだろうか、として問いを投げかけて講義を終えた。

次に、大学教員特別講義（ゲスト講義）二回目…令和二年十一月二日（月）について述べる。

この日も前回同様、Zoomにより授業の中でリモート講義を行った。題は「古典は本当に必要なのです―函館陵北高等学校の生徒と考える―『徒然草』『源氏物語』を中心に―」とし、スライドを用いた。

はじめに、「文部科学省の話」として、文部科学省のウェブサイトや学習指導要領を用いて、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点」について説明をした。「どのように学ぶの？（主体的・対話的で深い学び）」により、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視して授業を改善していくということを示した。「何ができるようになるの？（資質・能力の三つの柱）」としては、「Ⅰ実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能」、「Ⅱ未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力など」、「Ⅲ学んだことを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力、人間性など」という点について示した。これらは、高校生にとっては、難しいところがあるだろうが、古典を学ぶ意義を考えの際には、学習指導要領についての理解は必要であろうと考え示したものである。

それを踏まえて、「古典」の授業の対象・要素として次の三つがあることを示した。

・自己⇨学習主体（文化のまっただ中にあり、文化を伝え合う者）

・教材⇨古典（伝え合う言語文化）

・他者⇨社会（集団）（文化を共有し、伝え合う集団）

これらの三者の主體的な、対話・対峙の仕方が重要であることを示した。特に、「①実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能」については、自己の問題意識にもとづき、教材を実際の生活に即して自分の力で自分なりに読み解くことができることが必要であること、「②未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力など」については、自己のもつ問題を解決するために、自分の考えを表現したり、他者の意見を取り入れて考えを深めたりすることが必要であること、「③学んだことを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力、人間性など」については、自己のもつ問題を整理・解決したあとで、さらに自分の考えを深化させたり、他への発展へと結びつけたりし、社会や人生に活かそうとすることが必要であることを示した。

次いで、これらにもとづき、次の三つの方法（具体的な授業の方法）を示した。

（1）学習主体に、古典教材を「解釈・理解」させ、教材と

「対話・対峙」させるようにすること。

〈2〉学習主体に、自己を「解釈・理解」させ、自己と「対話・対峙」させること。

〈3〉学習主体に、他者を「解釈・理解」させ、他者と「対話・対峙」させること。

ここで、菅原利晃(二〇一五)での、『源氏物語』の少女の巻を用いて、光源氏の我が子夕霧への教育方針を読み取らせ、生徒自らの進路への意識を喚起させる実践を示した(注3)。「源氏物語」の少女の巻に、光源氏が息子である夕霧をあえて大学に入れるという場面があるが、生徒にとって進路という問題を考える上で身近な教材となるものである。光源氏は息子夕霧をあえて大学に入れる(当時の大学は貧乏貴族しかいかなない)のだが、これが現代の高校生のそれぞれの立場に置き換えることができるのではないかとこのことを投げかけたのである。

当該授業内で用いたワークシートでは、「あなたは、親と進路について、特に大学進学や職業選択について話し合ったことがありますか。光源氏親子の教育方針・進路の在り方と似ているところやちがうところはありますか。」「自分の進路実現(希望大学や希望する職業)に合わせて『源氏物語』少女の巻と比較してみよう。」という課題について生徒に考えさせたことを示した。

これらから、当該授業を通して、生徒は、『源氏物語』少女の巻

における光源氏と夕霧との関係と自分の進路(親子関係まで)について考えることができたこと、すなわち、これが、前掲の「〈1〉学習主体に、教材を「解釈・理解」させ、教材と「対話・対峙」させるようにすること。」に相当することを示した。端的に言えば、生徒は、父親としての光源氏と対話しているのである(作者紫式部の教育観でもある)。古典を自分の身に沿うような形で読むことの可能性、必要性を問うたものである。

次いで、古典の世界と自分の進路との比較を通して、生徒は読みの深化がはかられ、自己分析・自省の段階へとつなげることができたこと、前掲の「〈2〉学習主体に、自己を「解釈・理解」させ、自己と「対話・対峙」させることに相当することを示した。古典を自分の身に沿うような形で読むことが、生徒の読みの深化につながることを示したものである。

さらに、前掲の「〈3〉学習主体に、他者を「解釈・理解」させ、他者と「対話・対峙」させること。」に関わり、生徒は、他の生徒や教師と話したり、実際に家庭で保護者と話したりして考えを深めていることを示した。

この実践は、古典の授業を通して、生徒の進路意識の喚起、向上、変化が見られたものであり、古典の世界の中の自分と同じような体験・思いから、今に生きる自分を見つめ直すこと、古典の世界の先人の生き方の発見と共感、いわば古典から学び取ることのできる「自分探し」をいかにするかが、古典の授業の一つの

目標であると示した。

まとめとして、前掲の、「Ⅰ実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能」については、教材を実際の生活、特に進路という問題に即して自分の力で自分なりに読み解くことができたこと、「Ⅱ未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力など」については、自分の考えを表現したり、他の生徒や保護者の意見を取り入れて考えを深めたりすることができたこと、「Ⅲ学んだことを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力、人間性など」については、自分の考えを深化させたり、学んだことを自分の人生に活かすことができたことを述べた。

さらに、札幌市立羊丘中学校の小熊剛彰教諭(当時)による『徒然草』の授業、単元名「あなたも兼好法師く悩み事相談うけたまわります」¹⁾、学習課題「現代の中学生の悩み事を、兼好法師に相談して解決のアドバイスをもらおう」²⁾について紹介し説明を加えた。

当該授業について、生徒は、『徒然草』の中の兼好法師のものの見方・考え方について読み取り、悩み事相談の解決にあたる見方・考え方について考えることができたこと、すなわち、前掲の「(1)学習主体に、教材を「解釈・理解」させ、教材と「対話・対峙」させるようにすること。」³⁾に相当することを示した。いわば、生徒は、兼好法師と対話しているということを説明した。次いで、兼好法師のものの見方・考え方と悩み事相談の解決策との比較・

照合を通して、生徒は読みの深化がはかられ、自己分析・自省の段階へとつなげることができたこと、「(2)学習主体に、自己を「解釈・理解」させ、自己と「対話・対峙」させることに相当することを示した。さらに、「(3)学習主体に、他者を「解釈・理解」させ、他者と「対話・対峙」させること。」⁴⁾に相当するものとして、他の生徒の話を聞いてよい点を生かしたり、自分の考えを他の生徒へ話したりする活動が見られたことを示した。

兼好法師のものの見方・考え方をもとに、同じような体験・思いつから、今に生きる自分たちを見つめ直すことができたのであり、さらに、古典という伝えられる言語文化から、文化を共有し、伝え合う自分たちという集団の生き方へのヒントをみつけることができたのである。

以上の、二つの授業実践を紹介した上で、次のように、「古典を学ぶこと」「古典で学ぶこと」「古典に学ぶこと」「古典と学ぶこと」についての意義を示した。すなわち、古典を読むこと、古典を学ぶことによつて、生徒は、光源氏と「対話」したり、兼好法師から「対話」してアドバイスをもらったりする。そこには「教材(古典)に」学ぶ謙虚な姿勢が見られる。同時に、友だちや保護者、教師と「対話」していくこと(自己と他者)、「教材(古典)と」ともに「対話」しながら読み解いていくこと(自己と教材)、「教材(古典)と」友だちとともに、「対話」しながら読み解いていくことができること(自己と教材と他者)を示し、これら

から自己に、他者や社会（家庭）をも加えた学びが進んでいくことを示した。

次いで、古典の教材についての特質について述べた。古典には、特有のものの方や考え方、いわば普遍的な知恵や教えがあること、古典教材は、それらの理解したことや考えたことを実生活の中の話題・問題や自分の経験・問題と結び付け、自分の考えをさらに広げたり深めたりすることができることを述べた。

これについては、「そもそも、古典の普遍的な知恵や教えというが、それは、自分の問題、経験と結びつかないと知恵や教えにはならないのは？」と生徒に問うた。つまり、「教材（古典）に」自ら出会い、学び、親しみ、「教材（古典）」とともに学びを深めていき、自分のものにならなければならないのである。

次いで、高校生には難しい面もあるが、世の中の動き・要請という意味合いから、新しい時代において「国語（古典）」が果たす役割について、文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（二〇〇四）の、「知的活動の基盤」「感性・情緒等の基盤」「コミュニケーション能力の基盤」として、生涯を通じて、個人の自己形成にかかわる点「文化を継承し、創造・発展させるとともに、社会を維持し、発展させる基盤となるものである」ということについて述べた（注4）。特に、「1個人にとっての国語」の「①知的活動の基盤を成す」「国語によって、これまで人類が蓄積してきた「知識や知恵」を獲得することができる。」、

および「2社会全体にとつての国語」「①国語は文化の基盤であり、中核である」「国語は、長い歴史の中で形成されてきた我が国の文化の基盤を成すものであり、また、文化そのものでもある。国語の中の一つ一つの言葉には、それを用いてきた我々の先人たちの悲しみ、痛み、喜びなどの情感や感動が集積されている。我々の先人たちが築き上げてきた伝統的な文化を理解・継承し、新しい文化を創造・発展させるためにも国語は欠くことのできないものである。」について触れてみた。端的に言えば、「古典に」学び、「古典と」学ぶことによつて、個人の自己形成と、文化の継承・創造・発展とに寄与するものとなることを示したものである。

これに続けて、「古典に」学び、「古典と」学ぶことによつて個人の自己形成と文化の継承・創造・発展に寄与するものとなるのは、果たして学校だけなのだろうか？」と生徒に問うた。また、そのことは、「古典だけなのだろうか？」「一般的な読書は相当しないのだろうか？」「映画ではだめなのか？」「マンガから感動してもいいのではないか？」「歌（和歌からJPOPまで）から感動はしないだろうか？」と問うた。

「そもそも、自分以外の、人の話から影響を受けないのか？人の話から影響を受けないのか？」とも問いかけた。これについては、「人つて誰？ 今の人？ 昔の人？ 昔の歌？ 今の歌？ 昭和の歌？」などと具体的に問いを与えた。つまり、人の

話を、外部からの情報を、昔であれ、今現在であれ、われわれは、必要に応じて（あるいは否応なく）それを取り入れ、自分のものにしなければならぬのではないか、と問うたのである。

講義の最後に、前回の講義の課題「〇〇のための古典」又は「〇〇のための古典の授業」について再考を促した。その際に、前回は「〇〇」には「大学入試」を仮に入れてみたが、実は、これは、「〇〇のための読書」や「〇〇のための人の話」、「〇〇のための歌」などと同じことではないだろうかと問うてみた。その上で、「〇〇」には、「自分」が入ったりするだろうし、今は「大学入試」「受験」ということが現実的には入るだろうと示し、最後に、それぞれ、自分なりにじっくりと考えることを宿題として投げかけて講義を終えた。

三 学習者の最終的な論文

前述の通り、長澤元子教諭は、Zoojを用いた大学教員特別講義（ゲスト講義）一回目や二回目、さらには、Padletを用いた、生徒同士での意見交流を活性化させ、最終的に今までの資料や対話をもとに、自分の考えを論文にまとめさせている。以下に学習者の記述の一例をあげる（論文中の軽微な誤りは筆者が修正した）。

【学習者Aの論文】

近年、昔の文学を学ぶ際は、あらかじめ現代語に翻訳してお

いたものを勉強したらいいだけのことであって、好きで使用したい人だけ専門で勉強したらいい、中学校と高校と時間をかけて古典の勉強したくない、情報化社会において古典を学ばなくても情報を得られるなど、古典をあまり必要と感じていない人が多い。しかし、情報を簡単に入手できるからといって、古典を学ばなくていいのだろうか。私は、古典を学ぶ必要があると考える。

人生はいろいろなことがあり、壁に当たったとき、今まで知らなかった異文化が何かヒントをくれるかもしれない。外国の知識や考え方、感性は刺激的で、いい知恵を提供してくれるが、過去に戻って祖先が語り継ぎ、書き継いできた物語からは勇気が与えられるかもしれない、と考えた。例えば、『源氏物語』がある。この作品は、第一部に、光源氏が数多の恋愛遍歴を繰り広げつつ、王朝人として最高の栄誉を極める前半生、第二部に、愛情生活の破綻による無常を覚り、やがて出家を志すその後半生と、源氏をとりまく子女の恋愛模様、第三部に源氏没後の子孫たちの恋と人生と、長編に及ぶ作品で、作者の紫式部は、主人公の光源氏を通じて、恋愛、栄光と没落、政治的欲望と権力闘争など、平安時代の貴族社会が描かれている。理想と現実のギャップを感じて挫折し、宗教的な心を抛り所とする心の推移が、紫式部のほぼ一生の実生活と共に具体的に描写されている。今、新型コロナウイルスの影響により、日本のみならず、世界中で

混乱が続く今だからこそ、この作品を読むことで、少しでも前に進む希望を与えるにできないと確信している。さらに、考えに深みや幅を得ることができると考えた。人間の一生は短く、同じ時代に生きる人との交流しかできない。だが、古典は様々な時代の様々な立場から描かれている。

【学習者Bの論文】

私は古典は必要だと思う。私がそう考える理由は二つある。

まず第一に、昔の人の考えに共感したり、学んだりすることができるからだ。私たちが好きな音楽を聴いたり、読書をしたるときに影響を受けて人生観が変わるように、古典からも学ぶことがあると考える。私は悩んだ時は信頼できる人に相談に乗ってもらったり、ネットを使って同じ悩みを抱えた人はどのように解決したのか調べたりしているが、音楽からもたくさん影響を受けている。音楽を聴いて共感したり、前向きになれたりすることがある。だが中学生の頃は気づかなかったが、高校で古典を学んだ際に、『源氏物語』のような恋愛話からは現代人でも共感できるような切ない恋心や複雑な人間関係を描いている。『山月記』では人間の感情を繊細に描かれているため、現代でもあり得る問題を描いていることに気付かされた。このことから、昔の人も現代人と同じようなことで悩んでいたことがわかる。そのため古典から刺激を受けることもあるからだ。た

だし、個人でもその時に持っている悩みや問題が違っていたり、すべての人が同じ解釈をするわけではない。だから、その時によって色々な解釈をすることができるのも古典の良いところだ。二つ目の理由は、日本の伝統的な文化を大切にすべきだと考える。私たちが古典を教わっているように、次の世代に古典を伝えるべきだ。外国人に外国の文化を聴きたくなるように私たちが外国人に日本の文化を聞かされた時に、答えられるように学ぶ必要がある。でも、今の古典の授業は内容重視ではなく文法重視のため、変える必要があると私は考える。これらの理由から、古典の授業を変えて次の世代にこれからも伝えていくべきだ。

学習者Aは、「私は、古典を学ぶ必要がある」として、「人生はいろいろとがあり、壁に当たったとき、今まで知らなかった異文化が何かヒントをくれるかもしれない。」と述べている。この「異文化」というのが、「外国の知識や考え方、感性」であるが、それ以外に「過去に戻って祖先が語り継ぎ、書き継いできた物語」をあげて、そこから「勇気が与えられる」と述べている。古典と読むことによつて、「少しでも前に進む希望」が与えられ、「考えに深みや幅を得ることができると古典のもつ意義・働きを述べている。

学習者AのStack上の書き込みの一部であるが、次のような書き

込みが見られる。続けて、6分後に学習者Iが反応しているが、これらの考えを取り入れて、先に示したような論文にまとめたものと察する。

◎学習者A 2020年11月2日16:17

以前は、古典を学ぶことで当時の時代背景とともにその作者や主人公の心情の変化を見ることができると思っていた。より、古典を深めていくためには、実生活と結びつけるとより魅力を得ることができると思った。

◎学習者I 2020年11月2日16:23

古典の物語を実生活の悩みなどと結びつけ考えられるということは、各々が自分なりにその物語からのメッセージを解釈するということであり、そのためには生徒が古典の物語を現代語訳するだけでなく、その物語を好きになって自分に落とし込もうと思える授業の仕方が必要なのだと思う。

「当時の時代背景とともにその作者や主人公の心情の変化を見ることができるといえるのは、論文中の『源氏物語』の記述部分に、「古典を深めていくためには、実生活と結びつける」は、論文中の「紫式部のほぼ一生の実生活」「今、新型コロナウイルスの影響により、日本のみならず、世界中で混乱が続く今だからこそ、この作品を読むことで、少しでも前に進む希望を与えるに違いな

い」「さらに、考えに深みや幅を得ることができる」などが相当する。

学習者Bは、「古典は必要だ」として、理由を二つあげてる。一つは、「昔の人の考えに共感したり、学んだりすることができる」ということ、もう一つは、「日本の伝統的な文化を大切にすべき」であり、「次の世代に古典を伝えるべきだ」ということである。特に、一つ目については、「私たちが好きな音楽を聴いたり、読書をしたりする時に影響を受けて人生観が変わるように、古典からも学ぶことがある」と述べている。これは、大学教員特別講義（ゲスト講義）の中での「古典に」学び、「古典と」学ぶことによつて個人の自己形成と文化の継承・創造・発展に寄与するものとなるのは、果たして学校だけなのだろうか？」「歌（和歌から）POPまで）から感動はしないだろうか？」といった問いからヒントを得て考えたものと察する（あるいは、その後の筆者のStack上の書き込みからヒントを得て考えたものと察するがこれについては次節に示す）。また、古典の読み方、向かい方について、「個人でもその時に持っている悩みや問題が違っていたり、すべての人が同じ解釈をするわけではない。だから、その時によつて色々な解釈をすることができるのも古典の良いところだ。」と述べているが、これは、古典を自分のものとして取捨選択したり、十分に消化した上で、その時々に応じて古典からの学びを取り入れたりするということである。単に解釈がバラバラであるということではなく、

古典を読む者が、それぞれに古典を取り入れているということを通じて述べているものである。最後に、「今の古典の授業は内容重視ではなく文法重視のため、変える必要がある」と述べているが、この主張は、他の多くの生徒にも見られたものである。なお、学習者Bは、『山月記』をあげて、「人間の感情を繊細に描かれているため、現代でもあり得る問題を描いていることに気付かされた」と述べているが、漢文調であり、難しい語彙も多い中島敦の『山月記』は、高校生にとっては、もはや古典とみなされるものなのであろう。

四 学習者の変容、並びに本研究の成果

学習者Bの変容について述べる。

学習者BのSlack上の書き込みを見ていく。

まず、「古典は本当に必要なのか『稜北』として、2020年10月26日、長澤元子教諭がチャンネルを作成し、生徒に書き込みを促した。次に、その翌日の書き込みの一部をあげる。

2020年10月27日

◎学習者C 10:22

古典は必修授業にするべきだと思う。

なぜかと言うとそうしなければ誰も古典文学を学ばないままになっってしまうからだ。そうすると、自国の芸術文化について、

ほぼ知らない状態で生きていくと思う。古典は昔の人の感じ方や考え方について学ぶことが出来るがくもんである。国民が、自国の歴史や芸術文化について全く知らない国。一国民として知っておくべきだと思う。

7件の返信

○長澤元子

たしかに、この前クロアチア人と日本人のハーフのたまちゃんと話したけど、彼はクロアチアの文化も言語も大事ではないと思っていたけど、その後思い直して、クロアチアで芸術の大学を出たそう。結局、どちらのルーツも学ぶことが、自分の人間としての「自分らしさ」の表現に繋がっているらしい。この論点は非常に大事だと思った。

○学習者D

ここまで来ると何でも教科で分けて勉強するのってめちゃくちゃ難しいなって思っていました

○学習者E

文化を学ぶだけのために古典が必要があるのかな、？日本の文化は今や古典ではなく、アニメ・漫画といった非現実的な日本の考え方であると思う。文化を知るならアニメや漫画を見るだけでも良いと考えた。

○学習者C

「昔ながらの」文化が大切だと言っています

○学習者F

昔ながらのなら古典で学ぶ以外の方法もあると思います。

○菅原利晃(教育大札幌)

なにごとくも、すぐに役に立つのがいいのかな？

○学習者D

知識は蓄積することに意味があると思います。蓄積していなければ他と結びつけて考えることは出来ないはず。多方向からの視野を得るためには古典の存在は必要だと思います。

◎学習者B 2020年10月28日11:33

古典は必要ではないと思う。

今のような授業では品詞分解や文法についてを重点的に教えられるが、それでは内容を理解したり昔の人の考えをあまり伝わってこないで、必要とするなら今のような授業ではなく昔の人の考えや教えを重点的に伝えて欲しい。

学習者Bは、前日の学習者Cの書き込み「古典は必修授業にするべきだと思う。」とそれの7件の返信に連鎖して翌日に書き込みをしている。この時点での生徒の書き込みは、「古典は必要か、必要でないか」の方向性を自由に述べているものであるが、学習者Bは、「古典は必要ではないと思う」と書き込んでいる。

その後の、学習者Bの書き込みをあげる。

◎学習者B 2020年11月2日11:36

最初は古典は必要ないと思っていただけ、授業で現代語訳で昔の人の考え方を知った時に、昔の人も現代人と同じ考え方を保持して共感したり、好きな音楽を聴いて人生の考え方が変わるように、古典を学ぶことでたくさんさんの刺激を受けることもあると思ったので古典は必要だと思う。

4件の返信

○学習者H

考え方違っても面白いよね

○長澤元子

漢詩とか、和歌の掛詞とかとHIPPOPと似てるなあ、って思うね。HIPPOPは結構政治的な発言とかも多いけど。立ち位置がマイノリティ寄りだから、それによりそう民族文化なんだと思うね。

○学習者G

人は他人からの影響を受けやすいよね。

○菅原利晃(教育大札幌)

「昔の人の考え方を知った時に、昔の人も現代人と同じ考え方を保持して共感したり、好きな音楽を聴いて人生の考え方が変わるように」はいい指摘ですね。また、すべて同じではないので、「考え方違っても」いいのでそれを考えることも大事でしょうね。ただ、人生の考え方変わるの、全員ではなく、その人のそのときの切実な問題があるからでしょうね。自分の身に

沿った古典、歌、言葉はその人にとって大きな成長へと結びつきます。

学習者Bが、「最初は古典は必要ないと思っていたけど(中略)

古典は必要だと思う。」と考えが変わったのは、これまでの生徒間のStack上の書き込みによる交流のほか、前述の通り、大学教員特別講義(ゲスト講義)の「歌(和歌からJ-popまで)から感動はしないだろうか?」といった問いからヒントを得て考えたものと察する。また、その後の4件の返信の中の筆者の書き込み「人生の考え方変わるのは、全員ではなく、その人のそのときの切実な問題があるからでしょうね。自分の身に沿った古典、歌、言葉はその人にとって大きな成長へと結びつきます。」によって、前述の論文を構想したものと思われる。

直後に、学習者Bに、以下のような書き込みが見られた。

◎学習者G 2020年11月2日11:38

すごいアホなこと言うかもしれないけど現代の人から学ぶことと昔の人から学ぶことの違いってどこにあるんだろ。

5件の返信

○長澤元子

ないんじゃないの?家族の言うことより某哲学者(誰か忘れた)の言うことのほうを信じてるって言ってる人が友達でいた

もん。東大生ね。

○学習者H

調べるものの充実性

○学習者B

んー、確かに育っている環境が違うわけだから、現代人は現代だけの見方になると思うし、昔の人は自分の考えていなかったことにも気づかせてくれるかもしれない。

○学習者G

これから古典学んでいけばその自分の考えなかったような考えに行き着くんでしょうか。これまで学んできて「あー、確かにな」とは思うけど「すごいな」とか「その考えはなかった」というのはなかった。考えてみれば共感はできるけど学んでるか?と言われると…んー。。。

○菅原利晃(教育大札幌)

我々は、知らないことが多すぎるのではないのでしょうか? いや、それがフツーなのでしょう。古典でも、小説でも、人の話でも、もっと近づいて聞く・読むべきだと思うし、そこから役に立つものも、逆に役に立たないものもあるのでしょうか(そのときには役に立たないけど、あとで役立つ等)。

ここでも、学習者Bは、「確かに育っている環境が違うわけだから、現代人は現代だけの見方になると思うし、昔の人は自分の考

えていなかったことにも気づかせてくれるかもしれない。」と一時再考している。ここでの「昔の人は」は「昔の人（から学ぶこと）」を指しているのだと推察するが、これは、論文の「第一に、昔の人の考えに共感したり、学んだりすることができる」「昔の人も現代人と同じようなことで悩んでいた」「個人でもその時に持っている悩みや問題が違っていたり、すべての人が同じ解釈をするわけではない。だから、その時によって色々な解釈をすることができるのも古典の良いところだ」という記述へのヒントになっている。

おわりに

筆者は、「古典に親しむ」目的・目標について、つぎのように示したことがある（注5）。

《古典に親しむ》目的・目標 ※古典の「魅力」に基づいて

◎「親しむ（親しませる）」

【古典の世界に】…知情意体の融合

生涯にわたって古典に親しむ

- (1) 感想「・好ましく思う、おもしろく感じる、興味や関心を持つ、さらに読みたいと思う、古典に魅力を感じる、いつまでも覚えていて」
- (2) 発見「・共通点、相違点、疑問点（自分との、他作品との、現代との…）をみつける、古典の魅力をみつける」

(3) 学び「・古典からものごとを学ぶ、古典がわかるということ自体がわかる、古典から学ぶということを学ぶ、古典になぜ魅力があるかを考える、自分の人生に役立たせ向上させる、すべてのものの見方を豊かにする」

(4) 伝え合い「・古典を伝える（受け継ぐ）ことができる、古典の魅力を伝えることができる、自分の思いや考えを他人に伝えることができる」

(5) 探究「・古典、文化、人間の魅力をさらに探る・求める、自身のあるべき姿、真理を探る・求める」

本稿で取り上げた実践では、長澤元子教諭の指導の下に、ICTを用いて、生涯にわたって古典に親しむための視点、視座を、生徒それぞれが得ることができた。

古典について、好ましく思ったり、興味や関心を持ったりするなど、学習者それぞれの(1)感想が見られた。

自分と他の学習者との、共通点、相違点をみつけたり、古典における現代との共通点、相違点をみつけたりするなどの(2)発見があった。

古典からものごとを学ぶこと、古典から学ぶということを学ぶこと、古典になぜ魅力があるかを考えること、自分の人生に役立たせ向上させようとする考えをもったことなどの、(3)学びも大いに見られた。

そして、何よりも、Slack 等の ICT を用いることで、(4) 伝え合い が活性化できた。古典の魅力を伝えることができ、自分の思いや考えを他人に伝えることができた。

さらには、古典、文化について考えを深めたり、自分自身のあべき姿について考えを深めたりすることができ、(5) 探究 も見られた。

本稿では、古典の意義、古典学習の意義をもとにした課題について高校生自身が ICT を用いた対話をもとに自らの考えを深める実際の授業実践を報告、検証した。そこから、古典を「社会や自分との関わりの中で生かしていく」ということへの考えを深めていくという成果を得ることができた。

「古典は本当に必要なのか」という問いに対する答えは、「古典を社会や自分との関わりの中で生かしていく」ということである。

それは、古典を学ぶ意義に結びつくものであり、最終的には古典とは何かという問いに通じる。

授業においては、古典に親しみ、自己を向上させ、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養うという目標がある。その際には、「古典を自分の生活や生き方に生かす」という観点から、今後は実際に「生かすこと」ができるような〈実の場〉としての教材研究や授業づくりが求められるのである。

注

(1) 中央教育審議会答申(二〇一六年十二月)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」による。

(2) なお、『徒然草』五十段を用いた授業についての実践報告及び考察は、長澤教諭により他日発表予定である。

(3) 菅原利晃「生徒の進路意識を喚起させ古典に親しませる授業―『源氏物語』少女の巻を読み自分の進路について考えよう―」(『月刊国語教育研究』No.516、日本国語教育学会、二〇一五年四月)による。

(4) 文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」(二〇〇四年二月三日)

(5) 菅原利晃「今、問い直される古典学習の意義とは」(『教育科学国語教育』八六六号、明治図書、二〇二二年二月)による。

※ 本稿は、科研費(基盤研究(C)) 課題番号:19K02827)の研究成果の一部である。

(すがわら・としあき/北海道教育大学札幌校准教授)

